

『ヴェニスの商人』における結婚表象:

ポーシアのロマンスと「慈愛 (Charity)」

神山 さふみ

シェイクスピアの喜劇『ヴェニスの商人』(1597)の批評は、ユダヤ人シャイロックに注目が寄せられてきたが、劇世界では、ポーシアが22.0%と一番多くの台詞を話し、二番目に多い Shylock を大きく引き離している。事実上、この劇はヒロインのポーシアが活躍するロマンティック・コメディである。そのプロセスは「箱選び」と「人肉裁判」というダブル・プロットから構成されており、いずれもタイトルロールのアントーニオが裏の主演として関わっている。アントーニオとバサーニオの男同士の友情は、批評家たちによって繰り返し指摘されてきたが、その一方で、ポーシアとアントーニオの関係については等閑視される傾向にある。そこで本論は、バサーニオと「結婚したいポーシア」とその「結婚を妨げるアントーニオ」の三角関係 (sexuality politics) を同時代の社会的コンテクストから読み直す。その上で、この劇の結婚表象の特性を分析する。

1. バサーニオを巡るポーシアとアントーニオの三角関係の予兆

『ヴェニスの商人』は *Il Pecorone* を主要材源としているが、シェイクスピアが変更した重要な点が二つある。一つは、ベルモントの女性領主の人物像である。妖艶な未亡人 (widow) から、父親を亡くし、結婚を控えた若く美しい処女に変更された。さらにポーシアという古代ローマのブルータスの妻と同じ名前が与えられ、そこに政治的敵対者、アントーニオ (Antony) の影を潜ませた。もう一つは、アントーニオとバサーニオの相関関係である。ヴェニスの「商船王」が青年を溺愛する、という点は共通しているが、材源の養父と養子の親子関係が壮年の商人アントーニオと青年紳士バサーニオというあいまいな「近親者 (kinsman)」に書き換えられた。いわば友情から同性愛まで幅広いスペクトラムを形成する男同士の親密な関係が加筆された。

劇世界は、理想郷「ベルモント」とロンドンによく似た商業都市「ヴェニス」という二つの空間から構成されており、それぞれ憂鬱な未婚者たちが登場する。ベルモントのポーシアとヴェニスのアントーニオはバサーニオを想って、先の見えない不安を抱えている。二人から想いを寄せられるバサーニオも、経済的逼迫という切実な状況に迫り込まれ憂鬱である。そこでバサーニオは莫大な借金を清算するために、豊かな遺産を相続したポーシアと結婚する、という乾坤一擲の賭けを計画する。この資金をアントーニオに無心するのである。Sonnet116が友情を結婚に擬えるように、ここでアントーニオは慣習法上の「妻の身分 (coverture)」に比肩するほどの「最大限の経済的援助」(1.1.138)を約束する。さらにバサーニオのためにユダヤ人シャイロックから3,000ダカットもの大金を借り、担保として肉1ポンドを差し出す、という人肉裁判の前提条件となる契約を結ぶ。この契約は明らかに常軌を逸しており、アントーニオはバサーニオにただならぬ感情を抱いていることを示唆し、ポーシアへの対抗意識を現出する。本論の視点から劇前半部を読み解けば、そこで観客に提示されるのは、バサーニオを巡るポーシアとアントーニオという三角関係の予兆なのだ。

2. 箱選びの場—ポーシアの愛、アントーニオの影

危険な海を越え、遙々ベルモントまで求婚に来たバサーニオは、ポーシアと再会した瞬間恋に落ち、箱選びへと邁進する。ポーシアの父親の遺言により、求婚者はそれぞれ銘の刻まれた金・銀・鉛の箱から正しい箱を選ぶ、という倫理観が試される。さらにポーシアは、外見と中身は一致しない、という趣旨の歌をヒントに与える。バサーニオは35行にもわたる長台詞を述べた末、ついにみすばらしい鉛の箱——正しい箱——を選び、ポーシアと結婚する。ここに至るまでに観客は、バサーニオの当初の求婚の目的がポーシアの富であったことなど忘れてしまったことだろう (中野 229)。箱選びの場は劇のロマンティックな光を強調する。

ところが突如「借金が返済できなくなり命の危険に晒されている」という手紙がアントーニオから届く。「一番大切な友人」を気遣う夫の態度からバサーニオの「bisexualな情愛」(Wells 242)が示唆される。バサーニオが一番愛されたいポーシアは恋敵に嫉妬心を募らせる。夫とアントーニオが同じ「軛 (yoke)」(3.4.13)に繋がれている、という光景を妄想しそれが真実であると思ひ込む。「軛」とは、同時代では結婚を象徴する最たる言葉であり、ポーシアが「結婚」と「友情」を相対化し不安に陥っていることを観客に効果的に示す。

事実、劇世界ではバサーニオを介してアントーニオとポーシアの三人の gender の境界線は曖昧に描かれている。わけてもポーシアは gender 表象において独自性を発揮する。ポーシアは、夫の助け手であり、貞節だが、才気煥発で男性以上によく喋り、夫婦の主導権を握る。加えて、ポーシアは heterosexual な夫の欲情を刺

激する時があれば、法廷という公的領域では雄々しく法学博士を演じ (Howard 433)、夫の homoeroticism を喚起する。ポーシアは gender 表象を変幻自在に演じ分け、恋敵に勝つために緻密な戦略を企図してゆく。

かくしてベルモントでの箱選びの場は、ポーシアとバサーニオの夫婦関係の成立だけではなく、ポーシアの恋敵アントーニオの影をも書き込むことで、この物語の大きな転換点を形成している。

3. 人肉裁判——ポーシアの勝利、それはアントーニオの敗北か

ヴェニス法廷では、法学博士ポーシアが裁判官になる。三角関係という視座から人肉裁判を見ると、何より成し遂げなければならないことはアントーニオの死を回避することである。なぜなら、もしアントーニオが死を遂げれば、聖書の「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(John 15: 13) という言葉を具現化することになり、彼の愛が妻の愛より優越することを認めざるを得ないからだ (Sinfield 125)。

いよいよシャイロックがナイフを振りかざす瞬間、「待て」(4.1.309) と遮り、キリスト教徒の血を一滴でも流せば死刑、という法解釈をポーシアは突きつける。アントーニオの死は回避され、ポーシアは目的を果たし、シャイロックは敗北する。しかし、夫の求婚資金を調達してくれたシャイロックに恩義のあるポーシアは、刑罰の詳細を公爵らに委ね、慈悲を与えるように頼む。閉廷後、法学博士ポーシアはバサーニオの指輪を求め、夫の愛を試す、という最後の戦略を実行する。妻ポーシアに嫉妬するアントーニオの言葉に促され、バサーニオは指輪を博士に渡してしまう。バサーニオとの homoerotic な関係を匂わせるアントーニオと処女妻ポーシアが対置される。同性愛は異性愛を排除するのだろうか。

4. 天界の調和の場——闘いの行方

物語の最後に付け加えられた「天界の調和の場」は、従来、二つのダイナミックな山場のあとの、いわばアンティ・クライマックスと捉えられてきた。しかしこの場面もまた、本論の視点からは重要な意味を持つ。

裁判に勝ち、ベルモントに戻った「国王」(5.1.94) バサーニオたちをポーシアが出迎えるが、夫の失くした「指輪」を巡り夫婦は痴話喧嘩を展開する。若い二人の夫婦愛を悟ったアントーニオは遂に観念し、「自分の幸せよりも親友の幸せを優先する」という自己犠牲によりバサーニオをポーシアに譲る。ここでポーシアはヴェニス法廷での事実を明かす。妻の献身的な「慈愛」にバサーニオはようやく目醒め結婚を完成させる。

バサーニオへの愛を譲り、ロマンスを成就させてくれたアントーニオに対して、ポーシアは超自然の成せる技のごとく三隻の船が積荷を満載して戻ってきたことを伝える。いわば恋敵にも「慈愛」を施すことによって彼に報いると言えるだろう。しかしアントーニオがひとり佇む姿は、愛を失った彼の孤独感を強調する。

劇世界では、莫大な借金を抱え、絶体絶命の危機に陥っていた紳士バサーニオは、乾坤一擲の賭けを行い、海の彼方の「対蹠地 (Antipodes)」(5.1.127) に向かい、結婚し、「金羊毛 (golden fleece)」(1.1.170) を得た。現実世界のイングランド臣民たちも貧困問題という深刻な社会不安を抱えており、商業ベースの植民地設立が疾風迅雷の勢いで進められていた。こうしたコンテクストの中、観客が同化しやすい喜劇『ヴェニスの商人』は生み出されたのである。復活祭の頃、ベルモントで国王として再生したバサーニオを見るとき、観客は多少なりとも未知の地への夢と希望を抱いたことだろう。

5. おわりに

『ヴェニスの商人』には「友情 (同性愛)」と「結婚 (異性愛)」の三角関係が描かれていた。幕引きで結婚は友情に勝利し、諍いは和合へと向かうが、アントーニオの孤独な姿は劇に一抹の哀愁を残す。一方、妻ポーシアの緻密な企図と溢れる「慈愛」によって劇は喜劇へと導かれた。この劇の結婚表象の特性は、ヴェニスの人々に注がれたベルモントのポーシアの「慈愛 (Charity)」であり、この無償の愛が彼女のロマンスを成就させたポイントだと言えるだろう。

引用文献

Drakakis, John, editor. *The Merchant of Venice*, by William Shakespeare. Bloomsbury, 2010.

Howard, Jean E. "Crossdressing, The Theatre, and The Gender Struggle in Early Modern England."

Shakespeare Quarterly, vol. 30, no. 4, 1988, pp. 418-40.

Wells, Stanley. *Shakespeare, Sex, & Love*. Oxford UP, 2012.

Sinfield, Alan. "How to Read *The Merchant of Venice* without Being Heterosexist." *Alternative Shakespeares*, vol. 2, edited by Terence Hawkes, Routledge, 1996, pp. 123-39.

中野春夫『恋のメランコリー：シェイクスピア喜劇世界のシミュレーション』研究社, 2008.